

史跡岡山城跡本丸下の段

発掘調査現地説明会 資料

岡山市教育委員会

日時：平成21年2月7日（土）13:30～

場所：岡山市丸の内2丁目地内（史跡岡山城跡）

はじめに

岡山市教育委員会では史跡岡山城跡の保存整備事業のひとつとして、平成20年10月から本丸下の段（テニスコート跡地）の発掘調査を行ってきました。このたび調査がほぼ終了したため、みつかった遺構や遺物を公開することとなりました。

調査成果の概要

今回の調査の目的は、遺構の広がりや残存状況を確認することでした。元禄13年（1700）に作成された『御城内御絵図』によると、今回の調査範囲では鉄砲蔵と考えられる蔵2棟と、中門（長屋門）の一部、厠（トイレ）がみつかるかと予想されました。

調査の結果、『御城内御絵図』に記されている中門の一部（図2の①）と蔵2棟の基礎（図2の②と③）と、厠（図2の④）を確認しました。これらの施設は幕末まで利用されていたようです。このほか、記録にない建物の基礎もみつかりました（図2の⑤）また、宇喜多～前期池田時代（約400年前）にさかのぼる可能性のある生活面から規則的にならぶ礎石を確認しました（図2の⑥）。この他、積み直しされた内石垣を確認することができました。

出土遺物は、瓦・陶磁器などがたくさん見つかりました。その中でも、蔵1の近くから出土した鉄砲の玉は、蔵の実際の使われ方を知る上で重要な発見です。その他に金箔を貼った鬼瓦や池田家の家紋である揚羽蝶の鬼瓦がみつかりました。

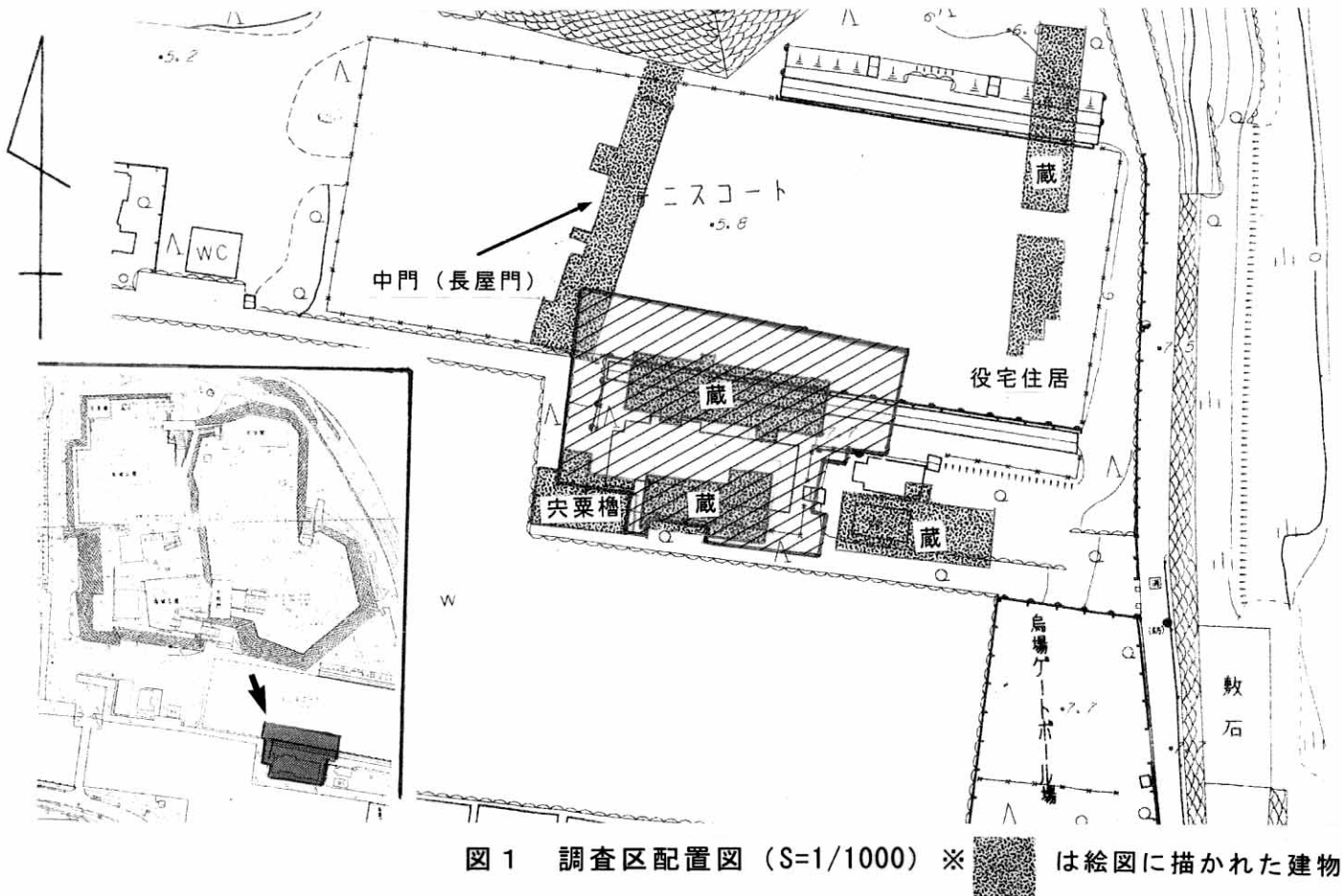


図1 調査区配置図 (S=1/1000) ※ は絵図に描かれた建物

① 中門（長屋門）

調査区の北東隅で基礎の石組を確認しました。この建物は南北に細長く延びる長屋のような建物です。人の出入りを制限し、蔵がたくさん建っている貯蔵エリアと他のエリアを遮断するために作られたと考えられます。

南側の石組みは壊されていましたが、東側は良く残っており、来年度以降の調査で全体が明らかになるものと期待されます。また、石組みに沿って石数がみつかりました。

② 蔵 1

調査区の北半分で確認しました。基礎の石組みが残っていました。記録によると鉄砲蔵として利用されていました。東西約31m、南北約9mの規模であることがわかりました。石組みの内側は念入りに砂をつめてあり、排水・防湿に気を使っていたことがうかがえます。また、建物の南西部にはこの蔵の東隣から、鉄砲の玉が3点みつかりました。その他、蔵の南側で、こぶし大の丸石を敷き詰めた部分がみつかりました。何のために石敷を作ったのか理由はわかりませんが、蔵の排水や防湿との関わりが考えられます。

③ 蔵 2

調査区の南半分で確認しました。蔵1と同様、基礎の石組みが残っていました。こちらの蔵も、記録によると鉄砲蔵として利用されていたと考えられます。東西約18m、南北約8mの規模であることがわかりました。蔵の北側には飛び出た場所があり、絵図の記録によると、^{ひさし}庇 と考えられます。

④ 厠

蔵2の東隣でみつかりました。この厠も絵図に記録が残っており、今回の調査で見つかるものと予想されました。南北約2.5m、東西約1.5mであることがわかりました。南北に二部屋ならんでおり、そのうちの一つには便槽と考えられる甕が残されていました。

⑤ 記録にない建物

蔵2の西側で基礎の石組を確認しました。元禄13年の絵図に記されていないことから、この絵図の作成以降に建てられたものであると考えられます。東西約6m、南北約3mの規模です。何に利用されたのかは不明です。

⑥ 宇喜多～前期池田時代の生活面

蔵や中門がつくられた地面から1.5mほど掘り下げたところ、規則的にならぶ礎石がみつかりました。礎石をもつ建物は2棟あり、小さな礎石を使った建物は東西約5m、南北約2mの小規模な建物と考えられます。東側の大きな石を使った建物は、調査区の外へ広がっており、今回の調査では規模はわかりません。

これらの建物は戦国時代末から江戸時代初期（約400年前）にさかのぼる可能性があります。礎石をもつ建物の記録は残っておらず、今回初めて明らかになりました。岡山城の変遷を知る上で重要な発見といえるでしょう。

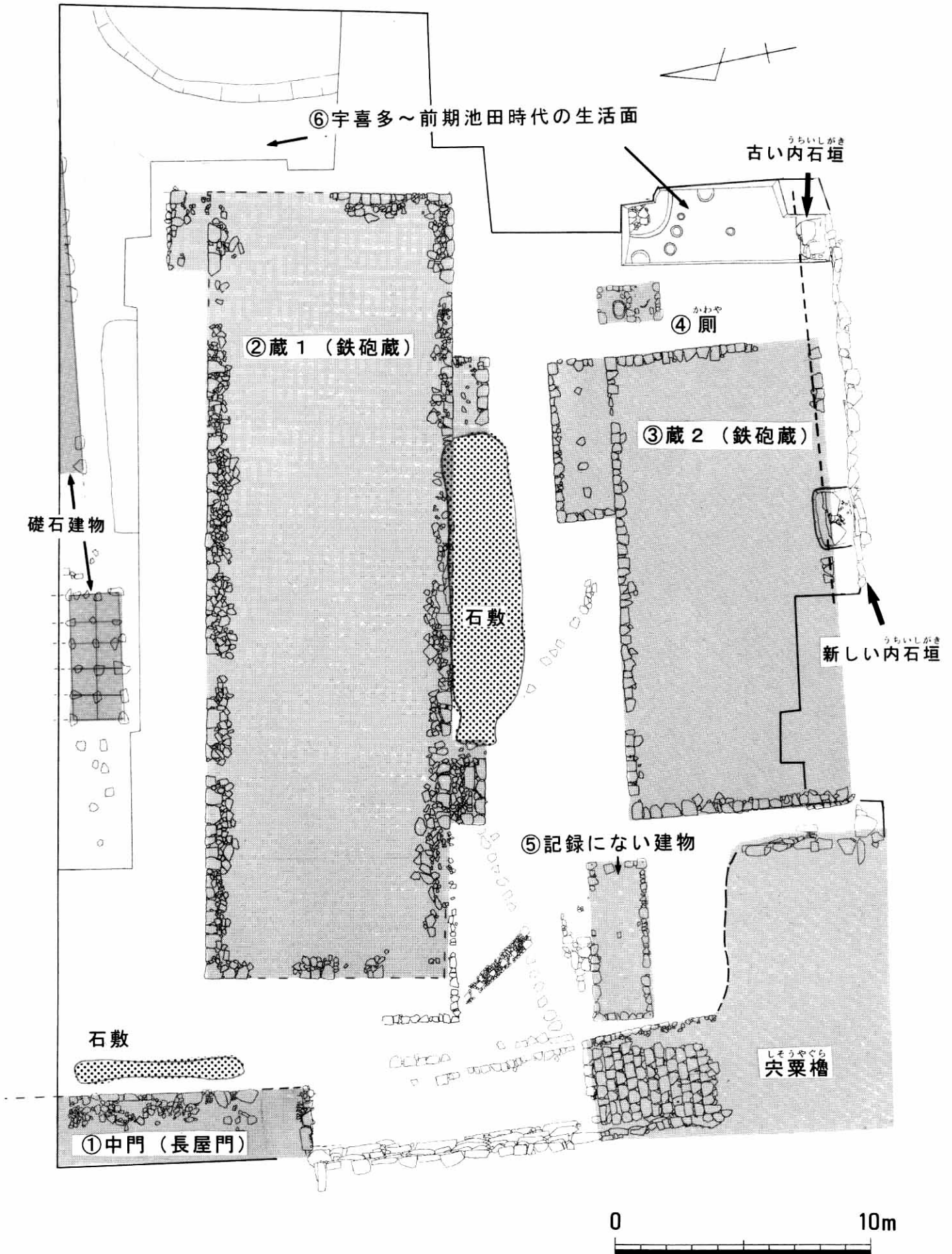


図 2 全体図 (S=1/200)

みつかった遺物



おにがわら きりもん うき たげ かもん
鬼瓦（桐紋：宇喜多家の家紋）



おにがわら あげはちょうもん いけだけ かもん
鬼瓦（揚羽蝶紋：池田家の家紋）



大：鉄製	直径 53 ミリ	522 グラム
中：鉛製	直径 19 ミリ	38 グラム
小：鉛製	直径 12 ミリ	14 グラム

鉄砲の玉